

2. 人間と労働

人間と自然との関係
物質代謝の効率的運営

今回のキーワード

- ⊕ 労働
- ⊕ 人間個人と動物個体
- ⊕ 本能と自覚
- ⊕ 知識
- ⊕ コスト

今回の課題

- ✓ 労働の特質を明らかにする
- ✓ 経済活動における人間個人の形成を明らかにする
- ✓ 人間と、まわりの自然との関係を明らかにする

今回の内容

1. 労働の特徴
2. 過程としての労働（労働過程）
3. コストとしての労働

1. 労働の特徴

経済活動による人間個人の形成

運動としての生命

- 生命一般の特徴
 - “自己”というユニットの内部での力の制御・統一
 - その最も高度に発展したのが人間

生産と労働

- 以下のことを「1.」で確認した。
人間の場合には、——
 - 生産と消費とが分かれている。
 - 生産の方は効率的・社会的にやれる。
- しかし、実際には、決定的に重要なのは、
生産そのものではなく、
生産において発揮される労働，すなわち、
消費から切り離して生産を自分自身で
運営する際に発揮される労働である。

労働

- 労働
 - 人間が自分自身の生命活動（生活）を
自分自身で運営するために発揮する、
人間において力を高度に制御・統一する運動
- 労働において人間は
 - 自分を対象から完全に区別し、
それを通じて対象を認識せざるをえなくなる。
↓ こうしてまた
 - 知識を産出する。

例

高度って？(1)

- 少なくともDNAレベルでは、
ヒトとチンパンジーとの違いは
ほとんどないし、
残った違いも決定的ではない。
- タイムマシンに乗って、
ヒトの先祖が現生類人猿の先祖から
分離した瞬間に立ち会ったところで、
見た目には全く違いがわからないだろう。

例

高度って？(2)

- ヒトの先祖は現生類人猿の先祖よりも
ほんの少しだけ、力の制御の仕方が
高度だった。
- その程度の違いが、ヒトにおいては、
 - 時間的には、
世代を超えて雪だるま式に膨らんでいき、
 - 空間的には、
部族を超えて伝播していった。

例

高度って？(3)

- その結果として、今日では、
 - 類人猿は昔と同じ生活をしているのに対して、
 - 人間は物質代謝を効率的に運営して、
物質的にも精神的にもますます豊かになっ
ている。

出発点におけるほんの
わずかな程度の違い

人間

類人猿

先取り：後で論じます

高度の内容

- もちろん、今日では、
動物の生命活動と労働との違いは
程度の違い（量的な違い）ではなく、
根本的な違い（質的な違い）である。
- この根本的な違いを、以下では、
2点において明らかにする。
 1. 構想の実現
 2. 意志への従属

(例)

労働による知識の生産(1)

- 目の前にある草を、本能のおもむくまま、むさぼっている限りでは、せいぜい《あそこら辺に草があるぞ、この草は旨いぞ》というくらいの知識しか手に入らない。

(例)

労働による知識の生産(2)

- 自分で食べるホウレンソウを自分で育てる（労働によって生産する；後述するように、自分の意志で、減らすべきコストとして行う）ようになると、否が応でも知らざるをえない。
 - 日向に蒔いた種はよく育つ（光合成）
 - 水浸しになった種は育たない（呼吸）
 - etc

力の自覚的な制御・統一

1. 構想の実現

- 実際に生産する前に頭の中で生産している。
- その際に、知識を適用する。

2. 意志への従属

- 実際に生産している最中は自分の意志のもとに自分の力を服させる。

1.1 構想の実現

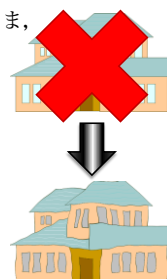
労働の第一の特徴

構想

- 観念（＝理想）において結果（＝生産物）を先取り（未来の実現）
- 結果 [ex.完成予想図] から逆算して、
 - 生産方法 [ex.設計図、使用する材料etc] 作業手順 [ガントチャートetc] を決定する。
 - そのすべてにおいて、既存の知識を適用している。

(例)

クモは、本能のおもむくまま、枝と枝の間に、美しい幾何学的構成と絶妙のバランスで、見事な巣をつくる。



ヘボ大工は、家を建てても、シックハウスになる。

例

しかし、決定的に違うのは、ヘボ大工は、実際に家を建てる前に、頭の中で家を建てているということ。

建具表 工程表 設計図

例

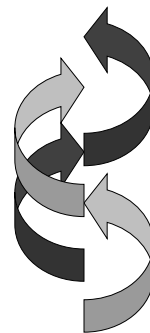
そして、決定的に重要なのは、頭の中で建てた家は、決してシックハウスではなく、キラキラでピカピカの理想的な家だということ。

理想と現実

- 理想と現実とのギャップを経験
 - 理想に現実を近づけようとする。
 - 欲望を満たすべく、能力を向上させようとする。
- ↓ これを通じて
 - 能力（＝労働力）の向上

能力と欲望とのスパイラル

- 能力が高まれば、
- 欲望が深まり、
 - 欲望が深まれば、
 - 能力が高まり、
 - 能力が高まれば、
 - 欲望が深まり、
 -



例

大工の場合には…

- 平屋建ての家ができた
 - 今度は二階建ての家が欲しい
 - 二階建ての家ができた
 - 今度は台風には負けない頑丈な家が欲しい
 -

※ 単なる空想ではない、現実的な欲望は、その時代の人々の能力（社会の能力）に制約される。

例

クモの場合には…

- クモは、
 - クモの巣しかつけれないからこそ、
 - クモの巣しかつこうとしない。
 - ▲ かつ、
 - クモの巣しかつこうとしないからこそ、
 - クモの巣しかつけれない。
- 能力と欲望とは
ここでは
悪循環に陥っている。

先取り：後で論じます

個人的能力の被制限性

- 実際には、
個人の欲望の制限はゆるやかだが、
個人の能力には狭い制限がある。
 - 個人の場合の効率的運営の被制限性
 - 社会が解決＝社会的運営
【⇒「3. 労働と社会」で後述】

1.2 意志への従属

労働の第二の特徴

意志

- 意志する自分（＝自分の意志）と、
意志に従う自分（＝自分の本能）とに
自分自身を二重化する。
- 自分の意志の下に、従わせる。――
 1. 自分の中の自然と
（脳・神経・筋肉等々、
ミクロで見ると細胞）
 2. 自分の外の自然とを
（労働手段と労働対象）

自由な存在(1)

- 本能のおもむくままに行う生命活動を
自分の自由な意志で行う。
- 労働する個人は自由な存在
 1. 自然からの自由
 2. 共同体からの自由 【⇒「3.労働と社会」で後述】
- 自分で、
自分の中の自然（→本能）をも
自分の外の自然（→環境）をも
制御し、変革する。

自由な存在(2)

- 自分の自由な意志で
最後まで遂行することができる。
- 逆に言うと、自分の自由な意志で
途中で止めることもできる。
- 自分で試行錯誤し、
自分で最適解を追求することができる。

自由自在な解の獲得

- 人間は労働によって自分の意志で
最適解を追求する。
- それによって、
それぞれの目的に適合した解
（＝手段＝媒介）を獲得する。

自然は人間の自由意志の領域

- 他の生物は,
 - 環境に適合するだけである。
 - いやむしろ, たまたま環境に適合した個体が, 自然淘汰の結果として, たまたま生き残っただけである。
- 人間は,
 - 環境に適合するだけではなく,
 - 自分の労働によって, 従ってまた自分の意志で, 環境を自分に適合させる。

例

要するに…

- 現生淡水魚が淡水に適合したのは偶然である。
- ↑↓ これに対して,
- 人間が治水しているのは必然的である。
 - つまり, 必ずそうなるように, 自分の意志で (例えば堤防を作って), 自然 (=水) を仕向けた。

必然性の実現としての自由

- 運命への従属
 - 他の生物にとっては, 自然の必然性 (法則性) は運命である。
 - 本能のおもむくまま, この運命に従属したり, 逆らおうとして, しつぱ返しを食らったりする。
- ↑↓ これに対して,
- 必然性の実現
 - 人間は, ——
 - 理論 (知識の生産)
 - 労働を通じて自然の必然性 (法則性) を認識し,
 - 実践 (知識の適用)
 - この必然性を自分の意志で, 自分の労働で実現する。

例

運命への従属

- 他の生物は, 本能のおもむくまま自然発火によって生じた山火事を運命として受け入れる。
- 本能のおもむくままに
 - ある個体は逃げ惑い, ある個体は何もせず, ある個体は無謀にも火に逆らおうとする。
 - ある個体は不運にも死に, ある個体は幸運にも生き残る。

例

必然性の実現 (1)

- 人間は,
 1. 理論 (知識の生産)
 - 労働を通じて燃焼の条件を認識し,
 - ① 酸素
 - ② 温度
 - ③ 可燃物質
 2. 実践 (知識の適用)
 - 労働において火を自分の思い通りに操る。

例

必然性の実現 (2)

- すなわち,
 - ➡ Not 必然性からの逃避
 - 火事に逃げ惑うのでもなく,
 - ➡ Not 必然性の受容
 - 諦めて何もしないのでもなく,
 - ➡ Not 必然性への抵抗
 - 無謀にも火に飛び込んだり, うちわであおいで かえって火の勢いを強めたりするのでもなく,

(例)

必然性の実現 (3)

- それどころか、必然性＝法則性を利用して、自分の労働で消火する。
 - ① 砂をかけて
 - 燃焼の条件：酸素の意図的除去
 - ② 水をかけて
 - 燃焼の条件：温度の意図的低下
 - ③ 家を打ち壊して
 - 燃焼の条件：可燃物質の意図的除去

(例)

必然性の実現 (4)

- あまつさえ、自分の欲求を満たすために、火を自由自在に、好き勝手に利用する
 - ランプ（照明）
 - オープン（調理）
 - ストーブ（暖房）
 - etc

あらゆる対象の手段化

- 他の生物が、適者生存の過程で変化させたのは、
 - 基本的に自己の有機的体である。
- 人間は、自分の目的を達成するために、
 - 自己の有機的体（＝有机的自然）を
変革して手段にするだけでなく、
 - 自己の外の自然（＝非有机的自然）を
変革して手段（労働手段・生活手段）にする。

知識と労働

- こうして、労働は
1. 知識を生みだし、
 - 労働の結果としての知識
 2. 知識を適用する
 - 労働の前提としての知識
- ※ 労働の方が出発点である。



2. 過程としての労働

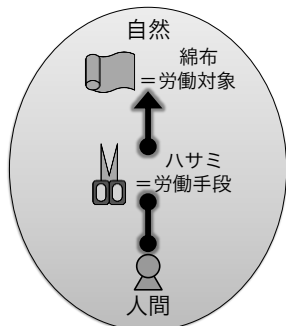
労働過程

労働力と労働

1. 労働力
 - ≡ 労働する能力
 - ↓つまり
 - 労働するために支出される
自分の肉体的・精神的な力の総体
2. 労働
 - ≡ 労働力の発揮・支出

労働過程の三契機

1. 労働
2. 労働対象
3. 労働手段



生産手段

- 同じ物が
ある労働過程では労働対象になり、
別の労働過程では労働手段になる。
 - 労働手段か労働対象かを決めるのは
労働の具体的形態 (= 具体的労働) である。
- 労働過程の結果である生産物という観点からは、
労働手段と労働対象との区別はなくなり、
どちらも生産のための手段、つまり
生産手段になっている。

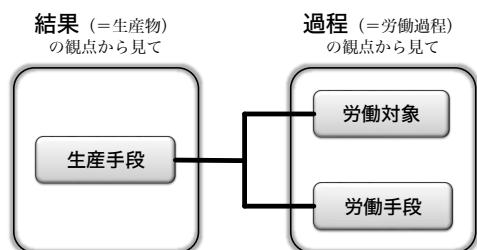
例 ① 同じ物が手段にも対象にもなる

- 牛は、
 - スキを引かせれば労働手段であるが、
 - 食肉用に育てれば労働対象である。
- ミシンは、
 - シャツメーカーにとっては労働手段であるが、
 - ミシン修理業者にとっては労働対象である。

例 ② 結果においては区別は消えている

- シャツを生産する労働過程においては、
綿布 (= 労働対象) と
ミシン (= 労働対象) とは
違った役割を演じた。
- ⇕ しかし、
- 完成したシャツ (= 生産物)
つまり結果を見ても、
綿布もミシンも関係ない。

生産手段



3. コストとしての労働

物質代謝の効率的運営としての経済活動

コストとしての労働

- 本能的活動はコストではない
 - あ、私、いつの間にか息吸ってる...
 - いや呼吸を減らせて言われても...
- ⇓ これにたいして
- 自覚的活動=労働はコストになる
 - もっと多くのパンが焼きたい
 - もっとおいしいパンが焼きたい
 - 単位は時間

物質代謝の効率的運営

- 物質代謝の効率的運営
 - =コストとしての労働を
どうにかして節約すること
 - =最小のインプットで
最大量・最高品質のアウトプットを
 - 生産力の上昇

新労働と旧労働

トータルコストが問題

- 1. 新労働
 - 生産物を生産する場合に、その生産過程で
支出されたのが新労働
- 2. 旧労働
 - 生産物を生産するのに使われた生産手段を
生産する生産過程で行われたのが旧労働

例

新労働と旧労働

- 今日、
1時間の労働を費やして、
鮭1尾（昨日からストックしておいた）を
焼いて食べ、
5時間の労働を費やして
柿10個をとって食べた。
- もしこの鮭1尾を捕るのに、
昨日に5時間の労働を費やしたならば、
トータルコストは
柿10個（5時間労働）より
鮭1尾（1+5=6時間労働）の方が高い。

例

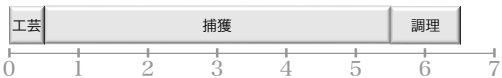
旧労働と生産手段

- 1. もし今日、鮭を焼くのにカマドを使い、
- 2. もし一昨日にこのカマドを製造するのに
10時間かかり、
- 3. もし平均してこのカマドは
鮭20尾を焼けるだけの耐久性を
もっているとたら、
- 鮭1尾のコストに、更に0.5時間が加わる。

例

焼き鮭のトータルコスト

カマド (=労働手段) 1個を生産する ための工芸労働	生鮭 (=労働対象) 1尾を生産する ための捕獲労働	焼鮭 (=生産物) 1尾を生産する ための調理労働
旧労働（一昨日）	旧労働（昨日）	新労働（今日）
0.5時間 (鮭1尾当たり)	5時間	1時間



今回のまとめ

- ❖ 動物は本能的なふるまいしかないが、人間は自覚的にふるまうことができる
- ❖ 自覚的なふるまいの発生源が労働
- ❖ 労働の二つの特徴
 1. 構想の実現
 2. 意志への従属